





◆14日（番号は遡行図参照）晴れのち曇り

- ①滝の上沢駐車場 4:45
- ②堰堤上 5:34
- ③お函手前 7:06
- ④葛根田大滝 8:45
- ⑤北ノ又沢右俣 11:50
- ⑥湿原 15:02
- ⑦八瀬森山荘 15:33

◆15日曇り（ガス）のち晴れ

- ①八瀬森山荘 6:00
- ②一畚山 9:54
- ③三ツ石山 11:03
- ④三ツ石山荘 11:30
- ⑤三ツ石山登山口 13:25

天気予報はあまり芳しくなかった。今日と明日はなんとか持つだろうが、明後日以降は最悪だ、天気図とにらめっこしたが、よくなる兆しがない、4日間の長期で溪に入るには不安が残る。予定では、3つの沢を野営をしながら渡り歩こうと思っていたが、変えざるおえなくなった。色々迷ったが、沢は1本だけ、野営も中止して小屋泊に切り替えるしかなかりそう。

前日、滝の上温泉駐車場に昼過ぎには到着して温泉に浸かる。車にもどりスーパーで買った前沢牛を焼いて食べたが、柔らかくて噛みごたえが無い。

ビールで無理やり流し込み「やっぱり肉は噛みごたえが無いとダメだなあ」とつくづく思った。車内は狭いから車のそばにグランドシートを敷き、毛布にくるまる、そばには立派な休憩所もあったが利用しなかった、それより星を眺めたかった為だ、流れ星を数えているうちに眠ってしまった。

空が白み始めた頃ノロノロと出発、地熱発電所の脇を通る、大地から白い煙がもうもうと立ち込めているさまは壮観であった。地熱発電所を過ぎて山道に入り堰堤を越えたあたりで入溪する①。

広い河原で装備をつけて遡行を開始する、しばらく河原を歩くと右岸にスラブ状のナメ滝が流れ込む②、ここを過ぎたあたりから河原から溪谷へと景色が変わる。広い溪谷を眺めながら岩手の溪を楽しむ、入溪点から90分程で葛根田川のハイライト“お函”④に、エメラルドグリーンの深い釜に赤茶色の淵を歩く、川底を覗くと40cm超えのイワナが数匹泳いでいた。水はさほど冷たく無い、ハツれるがあえて泳ぐ、泳ぐと冷たさを感じて日向に出て暖まる。晴れてはいたが、空を見上げると大塚さんから教わった巻雲が鉤爪状だった。



お函（遡行図④）

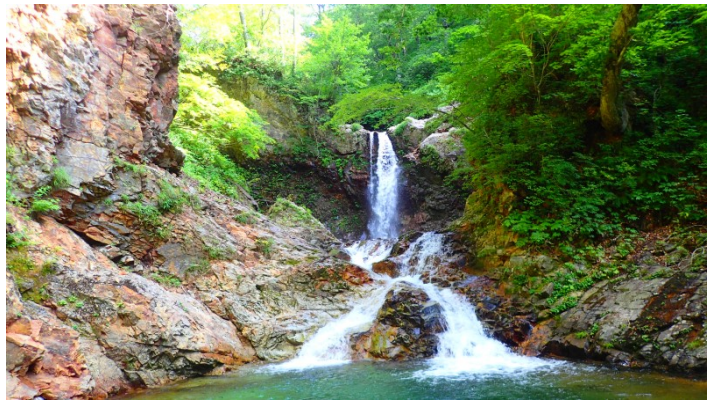
お函を出るとまた河原の景色へと戻る、お函で遊んでしまったし、空の雲も気になり葛根田大滝まで急ぐことにしたが、川面には、イワナが走り竿を出したくなる。だがここはガマンガマン、ここで竿を出したら今日中に小屋までたどり着けなくなる、まずは角大滝を超えないといけない。後ろ髪を引かれる思いで遡行を続ける。

やっと、葛根田大滝2段15mについた⑥、この滝は左岸から簡単に巻けた。大滝を抜けて念願の竿を出す。ここから枝沢まで、釣りを楽しむことにした。ここぞと思った場所に毛針を打ち込むとすぐに当たりが出る。昨日駐車場で話したパーティは「1匹も釣れなかった」と言っていたが、それがなんの冗談かと思うほどよくかかる。

30cm弱を2匹釣ってキープした。同じサイズを3,4匹釣れば十分だったので20cmに満たないのは全てリリースする。そんな事をしているといつのまにか二俣へ⑦、ここから先の枝沢に入ると魚はいそうに無いので荷物をデポしてからもう少し本流釣り上がり、さらに2匹キープして竿を納めた。魚はその場でさばいてから、1匹を昆布締めして、3匹を炒り糠塩でまぶす。こうしておけば常温で2,3日はもつからだ。

枝沢のCSを抜けると水量が減る、左右はブナの原生林の中を蛇行しながら進む、川の中にトウホクサンショウウオがたくさんいた、「これ燻ると美味しいんだよな」と思ったが、思ったよりすばしっこいので諦めた。フキがそこら中にあり少しいただく、オオバギボウシもあったが新芽はなく諦めた。ミズを期待したが見つけられなかった。きっと斎藤さんや和田さんがいたらもっといろいろな食材を教えてください。

15mの滝⑧に出る、右岸から巻くが、登り口がわかりにくい、上がると踏み跡があり落ち口にすぐにでれた、トポにこれが最後の滝との事だったがしばらく歩くと直登不可能な5mの滝⑨に出くわした。巻道の踏み跡も無いので、見当をつけて右岸から上がる、酷い根曲がり竹のブッシュを漕いで上がっていくうちに稜線に出てしまった。これではルートから離れてしまうので、ブッシュを漕ぎながらなんとか元の川筋に降りた。程なくしてすぐに広い湿原に出る⑩。空はすっかり曇っている。湿原に踏み跡は無いが、花期を終えた水芭蕉の中を無理やり進む、これが尾瀬あたりなら鬮盛ものだろう。湿原を横断してまたブッシュへ入る、さらに小雨も降ってきたが、ここまでくればあと少して八瀬森小屋だ。



葛根田大滝は右から巻く（遡行図⑥）



夕飯



湿原に出る、向かいの中に小屋がある（遡行図⑩）

小屋に着いたらイワナを炙り、フキご飯を炊いて、日本酒を燗ろう、そして、惰眠をむさぶろう。